

F・W・シェリング

『啓示の哲学』第三書（18）

諸岡道比古

第三十四講

新約聖書に含まれているサタンの本性的「自然」についての最も明瞭な説明は、サタンを被造物と考える普通の考えとうまく一致しない、ということを経験した私たちは批判的部分で示してきたので、私たちがあの批判的吟味によって導かれてきた見方、すなわち、〈サタンは単なる被造物ではなく、原理であるが、なるほど永遠な原理ではなく、この意味で創造されない原理ではないが、しかし原理である〉、という見方とこの普通の意見とが一層うまく一致するかどうか、を今私たちは探究しなければならない。サタンは単なる被造物ではない、と私たちは言う。このことについて極めて明瞭に説明するため、私たちは次の諸時機を区別することにする。

始まりのあの原理は全自然と（人間の意識）そのものの根底にある——私たちはこの原理を再びBと名付ける——、と私たちが語ったあの原理、それゆえ、このBは被造物で構わない。という

のは、私たちが証明したように、むしろあの原理はあらゆる被造物が *principium ex quo* 「それに由来するところの原理」、つまり創造の *ultimum* 「究極的な」 *hypokeimenon* 「基体」であるからである。この意味で、私たちは「単なる被造物ではないこと」（サタンの相対的超被造物性）を思ったり考えたりしえない。サタンは純粋なB、絶対的なBではない。まさにこのBは全創造における克服の対象である——本来、自分自身の外へ、つまり自らの根源的制限の外へ定立された無限な存在は、創造によって再びへしうること *Können* の制限の中へ／ポテンツとして、つまりAとして連れ戻されるべきである「——」。今、Aとして定立されたこのBは、根源的なAでも、単なるBでもなく、Aとして定立されたBであるのであるから、Aとして定立されたBは——このように、ものとして、「——」、被造物である、詳しく言えば、あらゆる被造物の中の最高の被造物つまり人間である（私があなたがたによく注意するようお願いすることは、被造物は根源的なAつまり純粋なしうることも、純粋なBとも名付けられないが、Bから

Aへ連れ戻されたAとしてそれは被造物である、ということである）、と私は言う。（明らかに瞬間とのみ考えられうる）この時機におけるBは、再び自らの根源的な明瞭性と純然性において存在し、Bは、創造以前のように、再びAと等しい（というのとは、創造においてBは自分と異なるものつまり自分の外に定立されたものであるからである）。私たちの展開のこの時機は、他の理論において想定されていた時機に相当する。その時機とは、サタン、すなわち、まさに後からサタンであるものが、いまだ純粹なものとして、墮落していかないものとして、天賦の栄光の中にいるものとして考えられている時機である。それゆえ、人間の意識の中で、しかもこの意識の諸制限で取り囲まれ、あの原理は現実的に被造物である。しかしながら、人間自身、前思惟的な *unvordenkliche* 所行によってこれらの制限を再び廃棄した。ところで、この原理はこれらの制限の中においてのみ被造物的であったので、この原理は、これらの制限から出ることでもってまさに、再び自らの被造物的性質から外へ歩み出る。確かに創造によって被造物的諸制限の中にあつたが、しかし人間の罪によって再びこの諸制限から外へ歩み出た原理、この原理は、今や再び自身制限のないしかもすべての具体的存在に対立する原理として、純粹な精神である。この原理は普遍的で宇宙的な原理ですらある。この原理はなるほど独自の種類の生であるが、〈存在すべきではないが、しかし存在しているし、一度刺激されると、再び、少なくとも直接的には、再び連れ戻されえないもの〉の偽りの生である。今やそれ自らの制限のなさにおいて生きており、極めて現実的になったこの原理について、私たちは、この原理が一つの精神である、としか言い

えない。この原理は、具体的なものすべてに現に対立するその本性「自然」ゆえに精神である。しかし、それが一つの精神であるのは、それが規定された、つまりもちろん根源的な精神ではなく、単に生成した精神であるからである（その限りで、マニ教的な意味での原理ではない）。／この原理は生成した精神つまり人間によって刺激された精神である。この精神は、根源的に人間の意識の中に定立されたが、しかし今この意識を踏み越え、それどころか、この意識を廃棄しそうな精神である。——それゆえ、あの諸時機すべてを通してじつくりと考えられたこの原理はようやく、誰もが承認するであろうように、新約聖書がサタンに添えた述語を思い出させるサタンである。――」

サタンは、創造を前提する生成したものの *ein Gewordenes* であり、この意味で被造物的なものであるが、しかしながら、無制限な精神の本性「自然」が制限から再び歩み出たことに基づいているがゆえに、被造物的なものではない、ということがいかに調停されたか、をあなたがたは理解する。

しかしながら、この確信にはすぐさま強力な異論が立ちはだかる。つまり、この展開によると、サタンそれ自身がまずもって人間の墮落に由来することになるだろう。それに対して、最初の人間の墮落はほかならぬサタンによってきっかけを作られ、サタンが最初の両親の誘惑者であつた、という啓示からの最も明白な教説がある。それにもかかわらず、この異論は表現をより厳密にただ規定することによって確かに解消する。

サタンそれ自身の現存在は、人間への実在的な *reell* 「暴」力だけのものと言われうる。この「暴」力をサタンはもちろん墮落に

よって初めて獲得した。人間を惑わす権力と「暴」力、この「暴」力は、人間がそれを現実的なものにさせないならば、未だに、實在的な、real「暴」力ではないが、この未だに、いわば観念的な ideell「暴」力をサタンがもちろん墮落によって初めて獲得したのではなかつた。むしろ事情はこうである。創造の基礎であり創造に先行するものであるあの〈始まりの原理〉は、人間の支配下にあり、本来の意味で、人間の主体であつた。しかしこの原理は、今人間の支配下にあるけれども、根源的な曖昧さ——この原理の本性「自然」の二重性「——」を取り去ることができない。究極的なカテゴリーまで追究すると、サタンは〈非存在するもの〉、つまり〈サタンに添えられた名前ベリアル、ヘブライ語で belyyal「ベリアル」においても表現されているもの〉のカテゴリーに完全に属している。beli「ベリ。無い」という語は否定を表し、yāal「アル。価値」という動詞は、／アラビア語によると、prominere「突き出る」と、proflare「秀でること」、突出する、突起する、という意味を持つてゐる。Belijaal「ベリアル」は、それゆえ、id quod non prostat, non exstat「何も秀でることが無く、目を引くものがないもの」、その本性「自然」からして、徹頭徹尾深みへ、つまり〈非存在するもの〉へ引き返すものである。なるほど創造が基づいていたのはまさに、この原理がこの非存在、nicht=Seynから、すなわち自己におけるもの An-sich から歩み出て、存在して現実的に exstant なつた、ということである。しかしながら、全創造の究極の意味はまさに、この原理を〈非存在するもの〉として説明することであり、非存在するものとしてこの原理はまた人間のうちに説明される。というのは、あの原理が〈非存在する

もの〉になつたが、まさにそのことによって、あの原理が最高のもの（本来存在すべきもの）を定立するものになつたことによつてのみ、人間が生じるからである。しかしあの原理はその本性「自然」の二面性を取り去ることができない。あの原理が再び現れ出て、自己を高める可能性が、つねに残留している。この可能性は、まさにそれが可能性であるがゆえに、〈端的に閉め出しえないもの〉である。現実的な原理として、あの原理は人間の純粹な意識によつて、またこの意識において、閉め出されている。しかし、単なる可能性として、あの原理はまさに〈端的に閉め出しえないもの〉である。それどころか、始めてすぐに語られ、しかも最近も繰り返された法則、つまりあらゆる生は試され、吟味されそして確証されるべきである、という法則によつて——この法則によつて「——」、あの可能性は、その上、必然的に人間に現れ思い描かれるに違ひない。可能性は人間には明らかに、人間の意志なしには無であるものとして現れうるにすぎない。しかもこのものは、人間の意志が可能性に組する場合に、或るものであるにすぎない。——しかし、この可能性は意志を誘惑し引きつけるものであり、この可能性は人を惑わす偽りの魔術である。人間は自らの最内奥において、すなわち自らの意志そのものにおいて、この魔術から自由ではない。「——」（可能性、権力、魔術はつねに一緒に存在し、しかも私たちは、展開の終わりのここにおいて始まりへ戻つてきたように、すべてのものが出て行つた最内奥のものが再び見つけ出されたことを理解する）。それゆえ、もちろん後に人間の敵、敵対者、サタンとして認識される同一の原理は、すでに違反以前に、この違反へのきつかけを作るものとして、人

を欺く偽りの魔術によって人間の意志を引きつけるものとして振る舞う。この際、普通の考えから抜け落ちるものは、人間を惑わすこの原理がすでに自ら悪しき原理、／それゆえ、すでに以前に墮落した原理である、ということであるにすぎない。私たちの見方によれば、あの原理は、先行する偶然的な所行や自ら犯した犯罪によつてではなく、その本性「自然」によつて、つまりその本性「自然」から見て、違反へ誘う原理である（しかし、それ故に、その本性「自然」から見て、悪であることなしに「、そうする原理である」）。

ところが、あの別の見方ではなく、この見方が、文字通り、新約聖書の最も明瞭な（今までまだ考慮されなかった）諸々の意見と一致するということが、まもなく現れるであろう。まず私は、私たちの見方だけをもっと分析し説明しよう。

人間の敵対者つまりサタンということで、人間の幸福あるいは人間の至福の敵を理解するならば、ここでもすでに（誘惑において）人を欺くあの霊「精神」が人間の敵対者、サタンと名付けられるが、しかし、ギリシア人たちがネメシス「人間の思い上がった無礼な行為に対する神の憤りと罰を擬人化した女神」と名付ける（崇高で、しかも彼らの考えによれば、畏敬を要求する権力）も、ネメシスはあらゆる確証されていない幸福に敵対し、しかもまさにそれ故に、ネメシスは、この幸福が吟味される諸状況へ導く、つまり、たとえ、それに相応しい、すなわち、この幸福に値する心術が幸福に結びつけられるとしても、その状況へ導く、とネメシスについて語られるような意味において、そうである。この意味において、最初の人間を誘惑する者はそれ自身としても人間

の敵対者と名付けられる、と私は言った。誘惑者は人間の安らかな幸福の妨害者、〈根源的な、しかしまさにそれゆえ不当な至福〉の妨害者である。けれども、誘惑者は、自ら墮落した存在者 *Wesen* であることなしに、こうでありうる。つまり、誘惑者はその本性「自然」から見て、しかも一般的法則にしたがつて、この妨害者でありうる。誘惑者は確かに悪を人間のうちに予見し、悪を白日の下に曝そうとする権力であり、その限りで、悪——たとえば、それ自身における悪ではなく、曝された悪つまり明らかにした悪であれ——を喜ぶ原因ですらあるが、しかしながら、それだからといって、誘惑者は、彼があらかじめ自ら神に対して反抗した、という意味で、自ら悪である必要はない。／心術の中にのみある本来の意味での悪が知れ渡るために、禁止されたもの、〈非存在すべきもの〉を可能にすることは、彼の現在の意志でも、先行した意志の帰結でもなく、彼の本性「自然」である。その上、悪を現す、すなわち、悪を暴露する原因そのものを悪と名付けるのは人間の性質「自然」上しかたがない、ということは承認されなければならない。けれども、このことは単に主観的な判断である。普通思い浮かべられるように、サタンが（それ自身において悪しき本性「自然」）であるならば、サタンは天において他の「神の子たち」の内にどうして姿を現しえたのであろうか『ヨブ記』一章六節。……主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。』、それどころか、神自身、熱心にしかも忠実に神に身を献げている人物に對しておおいに吟味することをどうして許しえたのであろうか、ヨブはどうしたらよいのであろうか『ヨブ記』一章一二節。主はサタンに言われた。……彼のものを一切、お前のいいようにし

てみるがよい。」。しかし、サタンの力が一層明らかでなければならぬ。ここで、以前の論拠を繰り返すとすると、すでに存続している世界の経過の中で、敬虔なものをわなに陥れることがサタンに許されているならば、何故に、このことがサタンに初めにも許されなかったのか、つまり最初の人間を同じく惑わすことがサタンに許されなかったのか——それゆえ、普通の意味で、自ら悪であることなしに——。サタンがヨブの時代に天から、つまり神の面前から追放されていないならば、私はどうして、サタンをそれ以前に、すなわち最初の人間を誘惑する際に、排斥された *verworfen* 存在者と考えるをえないのだろうか。〈同様に、神の配剤に属し神の究極的意図そのものに役立つ原理〉と考えてはならないのだろうか。以前のなお純粋な状態やそれに続いて起こるサタン自身の墮落についてのあの想定全体、つまり（悪の起源の説明を甚だしく混乱させる）この想定全体が立ち返るであろうことは、この原理が創造の直接的帰結において人間にとって完全に内面的であった、すなわち、この原理が完全な潜伏性において、その純粋な自己におけるものにおいて存在した、ということである（しかしながら、言っておいたように、このことは瞬間としてのみ考えられうる。というのは、二面的存在者であることがサタンの本性「自然」であり、この存在者が支配下にある人間の意識に対して自らを〈存在しうるもの〉と、つまり、それだけでは明らかに無であるが、人間の意志が可能性に組する時にのみ、現実的に存在するであろう可能性と示すことが、サタンの本性「自然」であるからである）。それゆえ、ここではあの原理は、墮落することなしに——というのは、墮落していないことがこの原理の本性

「自然」だからである——、人間の誘惑者であり人間を惑わす者である。／神の先慮によれば、この誘惑を承認することにおいて人間は死ななければならなかったが、この誘惑を承認することに関する問い、したがって、悪そのものを承認することに関する問いは、周知のように、神学にとって最も難しい問いの一つである。この誘惑が単なる被造物、詳しく言えば、自らすでに排斥された被造物に対して、あるいは神の啓示につまり創造そのものに必要な原理に対して承認されるか否かは、大きな違いである。しかも原理の端的には閉め出されえない本性「自然」の中に、いわば克服しえない二重性が、そうでなければカタストロフィーと回復との帰結によって初めて克服される二重性があるか否かは、大きな違いである（というのは、この原理が世界歴史の中でその役割を探し続ける、ということを私たちが後に見るであろうからである）。想定されるように、他人の不幸を喜ぶ被造物に、無垢に創造された人間を破滅へと共に進むことが許可されるかどうか、あるいはこのことを神がある原理に承認するかどうかは、大きな違いである。その原理の、神自身によって是認された唯一の機能は、それ自身において疑わしいものを現実的に疑い、未決定なものを決定し、しかもこの方法で、神自身が欲するに違いない危機を導くことである。それは、つまり、神は、悪が隠れたままであることを欲することができないし、しかも神は、悪が明らかとなり、神によって定立された善のもとに隠れないことを、まさに神の神性のために、欲するに違いないからである。

それゆえ、最初神聖にして犯しがたく創造され、それから神に反抗し、しかも他の霊たちと一緒に自分の破滅へ連れていき、そ

の後、神により追放され、人間たちに対する嫉妬に満たされ、また人間たちを滅ぼそうとした天使に関するあの考え全体は、〈今提出された見方でもって、サタンに関するあらゆる証言に完全な満足、それどころか、あの考えによるより一層よい満足が生じる時〉、ますます廃棄されなければならないし、しかも、神学そのものの関心において廃棄されなければならない、と私には思える。

最後に言ったことを確証するために、私たちが今、さらに見ていこうとすることは、最初の人間を誘惑し惑わすこととの関係においてサタンが原典でどのように表されているか、ということである。この関係で、サタンは年を経た蛇、*ho ophis ho archaios* 「年を経た蛇」(Apoc [alypsis]『Eハネの黙示録』一二章九節)と呼ばれる。というのは、人間に致命傷を与えるために、蛇が人間に近づく(人間に気づかれぬかすかな動き)があるように、人間を惑わす原理の動きは、原理が深みから高まり、人間に自らを示し、人間にいわば不意打ちを食らわし、そして予期しない者をびつくりさせる時、人間に気づかれぬかすかな動きであるからである。したがって、私たちが以前にこのことを詳説したように、*Proserpina* 「プロセルピナ。ローマの農業の女神。ギリシア神話のペルセポネーと同一視される。*proserpo* は前に這う、という動詞。*serpo* 這うから作られた *serpens* が蛇」という名前にすらまだ見られる蛇と、この原理とをたいそう一般的に比較すること——サタンは年を経た蛇と呼ばれる、すなわち、前思惟的な「考えられない」時以来、人間を惑わし、しかも全世界を混乱させた蛇と呼ばれる——は、誤謬へ導く。人類のこの偉大な邪道とその曲折すべてを通して追跡する私たちにとって、——*ho planōn*

ten oicoumenēn holēn 「全世界を欺く者」——この述語は、いかなる特別な説明も必要としなかった。それゆえ、この意味で、『Eハネの黙示録』の中で〈国は今やまったく神と神によって選ばれた者のものである〉[同書一二章一〇節参照]、ということが語られた箇所ですぐ前で、〈そして巨大な竜、年を経た蛇、*ho diabolos* 「悪魔」とか *ho satanas* 「サタン」とか呼ばれるものが投げられた〉、と述べられている(「悪魔とサタンという」対の名前は、すでにグロティウス [Hugo Grotius, 1583-1645 国際法学の父と呼ばれるオランダの法学者。彼の著書『福音書注解』に言及があるらしい]が注意しているように、理由がないことではない。この名前は異教とユダヤ教とに關係する。彼は *ho diabolos* 「悪魔」を異教徒たちの誘惑者と呼び、*ho satanas* 「サタン」をユダヤ教徒たちの敵や誘惑者と呼ぶ。それゆえ、その者は全世界、したがって、ユダヤ教徒たちと異教徒たちとを誘惑する、が付け加えられる)。——〈彼は地上に投げられたし、彼の天使たちも彼と一緒にまたそこへ投げられた〉[同書一二章九節]、と述べられている「——」。天から押し出され地上へ投げられるこのことが何を意味しているか、を私はここでついでに説明しうる。もちろん、キリスト教の勝利でサタンは宗教的意義を失った(これは、サタンが天から押し出されたことを意味している)。サタンが地上に投げられたことは、サタンがあらゆる権力を失ったことを意味するのではなく、サタンの権力がそれ以来別の——俗的な「——」意義を持った、ということの意味するにすぎない。この俗的な意義は、サタンが世界の政治的な諸領域との關係において持った意義とは別の何でありうるのだろうか。キリスト教の勝利

264
によって、それらの諸領域には、しかもそれらの諸領域の關係において、互いに大きくて強力な變化が生じた。それと共に、それゆえ、異教の範圍が一巡され包括された——／宗教的な誤謬が汲み尽くされた——後に、サタンの諸作用の新たな劇場つまり新たな歴史の少なからず血の滴る舞台が開演する。ここには、さらなる新たな展開が後ほど接続する点がある。私はここではこの点へ入っていくことのできない。

(一)『神話の哲学』「一四卷」一六〇頁「シェリングはProserpinaというラテン語の名前に、予期しない出現あるいは外へ現れ出ることという表現を読み取っている」。編纂者。

ところで、蛇として誘惑のあの靈が、すでに樂園の中に描き出されている。もちろん現実、蛇として、〈そして蛇は野のあらゆる動物たちより狡猾で（知恵が）あった〉『創世記』三章一節。主なる神が作られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。……』と言われることによって、描き出されている。ニールブル「Carsten Niebuhr, 1733-1815 ドイツの旅行家。『アラビア旅行記Reisebeschreibung von Arabien』1772 二巻は今でもアラビア研究の基本である」は、彼のアラビアへの旅行記の中で（第二巻三四四頁）、Jesidier「イェジディたち」またはDawasin「ダヴァジン。JesidierもDawasinも、北部イラクのクルド民族やシリア、イランやトルコに見られる奇妙な二元論者たちのセクトYazidisの人々の自称」と自分たちを呼ぶ現実の、しかも排他的な悪魔崇拜者たちの民族性に言及している。最後の名前は利口な者たちKluge、知恵ある者たちを意味している。知恵あることは〈非存在するもの〉の側に相応しい。原理つまり原初状態Urstand

の原理は、私たちが以前に見ておいたように、後に理解Verstandになる「本書第一三卷二九六頁」。ちょうど蛇が自然のものとしてのように、そもそも誘惑と違反の経過全体が外面的なものとして示される。技巧的ではなく、また、人間性における悪と害悪の根源についての単なる哲学説が技巧的に神話として表現されている、ということなどではなく、一言で言えば、恣意的にはなく、自然的必然性によって、この内面的経過が外面的なものとして明示される。人間の意識の状態全体からこの物語が由来するが、当時の意識の状態全体は、いかなる別の叙述をも許さなかった。

265
この叙述方法を神話的叙述方法と名付けようとするならば、このことと（いつものように）創作あるいは恣意的な言い回しという概念とはなく、意識の中の必然的な現象方法という概念とを結びつける場合、神話的と名付けることに對して何も異議を唱えられない。なるほど誤った表象にはないが、しかし意識のその都度の状態や〈意識の中のある種の経過の、その都度の状態に應じた唯一可能な現象方法〉に、この概念は順応しえなかつた、それどころか、啓示も順応しなければならなかつた。その場合、啓示は神話的なものを作らないし、神話的なものは啓示とは別個の先行するものである。この先行するものに啓示はよく浸透しうるが、啓示はそれを直接的には廃棄しえない。／何かある対象が反省する媒介においてどの様に現象するか、というあり方は、対象の性質によってばかりでなく、〈自らを反省する対象〉が変更しえない〈媒介の性質〉によっても同じくらい規定される。いわゆる人間の墮落に関するモーセ「第一書」の物語は、純粹に神の真理を含んでいるが、この真理はまだ神話の観点に立つ意識に現象しうる

ほどのものである。モーセ「第一書」の話は、事柄に関して、たとえこの話が純粹に内面的な経過を外面的なものとして表現しているとしても、最も深い啓示を含んでいる。この話は、まさにこの話が（人間を惑わす原理）を蛇として（神話的に）表現することによって、人間を惑わすあの原理の本性「自然」を最も深く捉えた。ところが、私たちがこの経過に関する私たちの叙述を、新約聖書の一層教義的な別の意見と比較するならば、私たちの叙述と一致しないだらういかなる意見も存在しないであろう。それどころか、その上私たちの叙述とのみ結合しうる一層多くの意見が存在するのである。私たちの説明によれば、樂園の中の蛇は実際、〈その本性「自然」から見て、あの非存在する（非存在すべき）原理〉である。この原理は自らを人間に提示しそして人間を惑わしうる、それゆえ、現実的にサタンである。その限りにおいて、サタンの欺きにより現実的に、罪が世界の中へやって来た。この際思い出すことを私があなたがたに願うするのは、神話に先行する最初の諸ポテンツのもとにも同様に、*Apate*「欺瞞」、欺瞞も現れ出ている、ということである。『知恵の書』「二章二四節。悪魔のねたみによつて死がこの世へ入り、・・・」によれば、悪魔の嫉妬によつて死が世界の中へやって来た。この嫉妬はしかしここでは、不当に幸福な者たちに立腹するネメシスのあの不興より、悪いものあるいは厭わしいものではない。誘惑が生じたのは、創造によつてあの原理が従属していた人間の意識から、*cui subjectum erat*「主体であつたものから」、あの原理がいかなる帰結を伴わずに、なお静かに高揚することによつてである——それゆえ、あの原理がその潜在性から現れ出て、人間にとって対象的になるこ

とによつて、あの原理はもはや人間に従属しようとはしない。このことから東洋人たち（ペルシア人たちと回教徒たち）は、サタンが人間を崇拜しようとしなかった『コーラン』二章三三節。・・・「ひざまずいてアードムを拝せよ」と言えば、・・・イブリースだけは、傲岸不遜にもそれを拒み、かくして背信の徒となった。岩波文庫版上巻一七頁」、ということを引き出した。というのは、*alicui subjectum esse*「あるものが主体であること」と *aliquem adorare*「あるものを崇拜すること」とは、東洋人の諸概念においてはある同一のことであるからである。

266

／＼最も注目し値する意見は、ヨハネの書の中にある意見である。私が引用する最初のものは、『ヨハネの手紙一』（三章八節）「罪を犯す者は悪魔に属します。悪魔は初めから罪を犯しているからです。・・・」の中にある（罪を犯す者は敵対者（*diabolos*「悪魔」）のような者である。というのは、敵対者は初めから罪を犯す、*hoi ap' arches ho diabolos hamartanei*「なぜなら、初めから悪魔が罪を犯す」、からである）である。私たちに對してこの節を、サタンが初めから自ら罪を犯していた、つまり、サタンが人間を墮落させる以前に、サタンが墮落していたことの証明として引用されがちである。しかしながら、私があなたがたに願うしたいことは、言葉をより厳密に考察することのみである。使徒は、サタンが初めから罪を犯していたと言うのではなく、サタンは初めから罪を犯すと言う、つまり *hemartēen*「罪を犯した」ではなく、*hamartanei*「罪を犯す」、と言う。（サタンは初めから罪を犯す」ということの中に、〈罪を犯すことがサタンの本性「自然」である〉ということがある。その場合、この罪を犯すことが何を意味

するか、を私はさしあたりそのままにしておくが、しかし、〈サタンは初めから罪を犯す〉ということは、〈サタンは罪を犯すこと以外まったく何もしえない〉、と言うことで十分である。このことは *ap' arches*「初めから」と同様に、使われた現在形の中にあるというのは、もしもサタンが、より短い時間であれより長い時間であれ、天賦の神聖性の中にとどまっていたならば、使徒は、〈サタンが初めから、罪を犯す〉、と言うことはできなかった——むしろ普通の考えにしたがって、初めからサタンは罪ある者ではなかった「——」。この言葉の明らかな意味は、〈サタンは、サタンが存在するや否や、罪を犯す〉である。サタンにとって、罪を犯す動き以外のいかなる動きも、いわばまったく存在しない。サタンはまったく動いてはならない、つまりまったく不活動でなければならぬか、あるいはただ罪を犯しうるにすぎない。ところが、このことは〈私たちによって想定された原理〉の本性「自然」にまったく厳密に適っている、それどころか、その上この原理にのみ適っている。というのは、私たちが以前表現したように⁽¹⁾、〈神を定立するもの〉が行為 *Actus* においてではなく、非行為において——神を定立するものが動く限りではなく、それが動かない限りで——原理であるが、そのような原理についてのみ言われることは、その原理が罪を犯す、すなわち、それが、初めから、言い換えれば、それが動くや否や、神を否定するものになる、ということであるからである。この箴言はたいそう的確であるので、この箴言は私たちのものの以外のいかなる説明をも認めない。

(1)『神話の哲学』【第二巻】一一八頁以下。編纂者。

ところが、この〈初めから罪を犯すこと〉が何を意味するのか、は質問されうるし、しかも、この説明を私たちは残しておいた。²⁶⁷／これは自ら、罪を犯すというのとただ同じことを意味しうる。今(さらに推測しうるであろうが)、そうすると私たちは、普通の考えが主張するもの、つまり〈初めから、すなわち存在すること、で、罪を犯すもの〉を持つ。 *hamartanein*「罪を犯すこと」を〈自ら罪を犯すこと〉と理解することは端的に必然的なことですらなかった、ということを私は注意する。というのは、*quod quis per alium facit, ipse fecisse putandus est*「誰かが他人を通して行うものは、自ら行ったと見なされる」⁽²⁾という規則によれば、*qui peccare facit, ipse peccare dicitur*「罪を犯す者は、自ら罪を犯す、と言われる」、と人は言いうるからである。しかしながら、このことは必要ではない。ギリシア語 *hamartanein*「罪を犯すこと」には、より特別な意義と一般的な意義とがある。より特別な意義は、〈本来の意味で罪を犯すこと〉であり、このギリシア語と同様に、これに対応するヘブライ語の *hata'* のより一般的でしかもここでは同時に根源的な意義は、*a scopo aberrare*「的から遠離ること」(射手が射当てないことにより、目標からそれること⁽³⁾)である。しかも目標は、円周で囲まれていると考えられる点であるが故に、目標からそれることは中心からそれること、*a centro deflectere sive aberrare*「中心からそれること」、あるいは中心から遠離ることと同じである。今この意味で、本来中心にとどまるべきあの〈始まりの原理〉について言われうることは、あの原理がその本性「自然」によって初めから、再び活動的な傾向性を持っているが故に、その原理が中心から離れる、とい

うことである。確かに自分自身であの原理はこのことをなしえないが、人間の意志なしではなく、まさにそれゆえに、あの原理は、人間がこの原理をおそらく現実性へと高めるとしても、人間の意志を引きつけようとする。このことは確かに原理の側の実在的な *reell* 逸脱ではないが、しかしながらすでに、観念的な *ideell* 逸脱である。原理は人間に対して内面的なままであるべきであった。それゆえ、原理が人間に自らを示し、自らを対象的にすることによって、原理はすでに *eo loco quo esse debet* 「存在すべきであったその場所に」存在していないし、それゆえ、このこともすでにその目的からそれることであり、原理が存在すべきであった *aberratio a scopo* 「的から遠離ること」、それゆえ、*hamartanein* 「罪を犯すこと」である。その限りで、原理について言われうることは、原理が *ap' arches* 「初めから」、初めから罪を犯している、その目的をはずしている、ということである。それゆえ、このことの中には、サタンが初めは善き天使であったが、時間の経過において初めて墮落した天使であった、というあの伝説に対するいかなる確証もまったくない。つまり、サタンは *ap' arches* 「初めから」、すなわちサタンが存在するや否や、罪を犯す。(一)「神話の哲学」【二卷】三一九頁「ヘドトス『歴史』第一卷 四三章で語られるイノシシをねらって投げた槍が的からはずれ、クロイソスの息子を刺してしまった話を引用している」。編纂者。

サタンの本性「自然」に関する別の極めて重要な意見は、／『ヨハネによる福音書』(八章四四節「あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、……彼の内には真理がないから

だ。』)の、ユダヤ人たちに向かって語ったイエスの言葉の中にある。それは、〈あなたたちは悪魔であるあなたたちの父のものである。しかも父が熱望するものをあなたたちは行おうとする。同一の者「悪魔」は *anthropoctonos ap' arches* 「初めから人殺し」である、すなわち、彼はその本性「自然」から見て、人間の生命をねらい、人間の意識を脅かす危険な原理である。この人間の意識の中にのみ人間の生命が存在する。悪魔は真理の中に存していなかった(さらにそのようなことが述べられる)、*en te aletheia ouch hestee* 「真理の中に彼は立っていないかった」、すなわち、悪魔はその真なる関係の中にとどまっていなかった、である。このこともまた私たちの見方から言われうることである。私たちがまさに表現したように、原理は、それが定立され、それがとどまるべき場所にとどまらなかった。しかし明らかに完了形 *hesteeen* 「立っている。*istemi* の現在完了三人称単数形」はここでは、最良のギリシア風のように、現在形の意義を持っている。*En te aletheia ouch hesteeen* 「真理の中に彼は立っていないかった」は、〈彼はとどまっていない、すなわち、彼は真理の中にとどまっていることができない。なぜならば、(すぐに付け加えられるが)いかなる真理も彼の中に存在しないからである、*hoti ouch estin aletheia en auto*「なぜなら、彼の中に真理は存在しないからである」〉、という意味である。というのは、彼の本性「自然」は〈非存在するもの〉であることだからである。〈非存在〉としての彼の中に真理が存在するにすぎない、*he aletheia autou esti to ouch einai* 「真理は、非存在することという、まさしくそこに存在する」。それゆえ、彼が存在する時、彼は真理の外に存在

する。彼の本性「自然」は、ただ嘘でありうるにすぎないし、(惑わす原理として)嘘をつくことである。「彼が嘘をつくならば、彼は *ec ton idion* 「自分から」、自分自ら、自らの本来的(原理的な)本性「自然」に適って、しかも彼はまったく別様ではありえないが故に、つまり彼が正直で——真理において——ありえないが故に、嘘をつく」。*pater tou pseudous* 「偽りの父」「偽りの父とは悪魔のこと」ということで彼は(非存在するもの)の原理と、つまりその本性「自然」から見て欺くものの原理と説明される。特に人間との関係における嘘は、この原理が人間にせがんで、この原理に存在を得させる、ということである。それゆえ、その点まで原理は人間の意志に依存することを承認する。しかも、このことによつて、人間の意志に次のような考えを引き起こす。つまり人間が原理に存在を得させたならば、その場合も、人間は原理の主であるであろう、という考えである。一方、現実「性」においては、これと反対のことが生じ、人間が原理の奴隷、原理の捕虜となる。その上ここでも私たちが忘れてならないことは、これらの判断すべては、キリストが完全に人間になった限り、キリストが完全に取りなしをする人間の観点から純粹になされた、ということである。／人間にとつてあの原理は、それが存在しようとするや否や、真理に反することであり欺瞞であるにすぎない。あの原理が神の目においてあるいは神の意図において客観的に何に役立つかは、ここでは問われない。原理は人間に敵対的な関係、つまり欺瞞と策略に乗せる関係を持つにすぎない。あの主観的な観点をヨハネの話すべてが示している。その上、キリストがヨハネ「による福音書」において表現した以上に鋭く、それどころかより

哲学的に、サタンの真の本性「自然」について表現することは不可能である。サタンはその究極的な根柢から見て、(それ自身において、その本性「自然」からして、非存在するもの)であり、欺瞞や偽りの幻惑によつてのみ(存在するもの)であることを望みうるものである。まさにそれゆえに、あの原理は、それが現実的な存在を得る以前に、初めから欺くのである。

今まで、それゆえ、時間の中で結果として起こった神からの離反に関するいわゆるあの歴史について、まったく何も注意されていない。

ところが、私たちは、この原理が、人間に起因した霊「精神」が存在を獲得、つまり意識を現実的に支配する「暴」力を獲得した、と考えるならば、霊「精神」は1)人類一般に普遍的な関係を持つ。この関係に関して、時期、*Periode* が区別されなければならない。

キリスト教はキリスト教以前の時間全体を(この原理が支配することを承認された時間)と見なし、この霊「精神」はこの世界の頭目、それどころか、この時代 *Aeon* の神、この世界時間の神である⁽⁷⁾。キリストはより強き者としてやって来て、その時まで作用していた抗しがたい権力をこの原理から奪ったが、この原理はその本性「自然」からして変わりやすく、決してそれ自身と同じでない。この原理はある領域で勝利し、他の領域へと転移することによつて、この原理はその本性「自然」において尽きることなく役割を変える。この原理の様々な相あるいは変化を綿密に調べることが、私たちの現在の課題ではない。全異教が霊「精神」の刺激から生じたが、私たちはここでは単に霊「精神」を考察しなければならぬ。／異教はその根柢から見て人間に敵対する宗教

ですらある。テミストクレス [Themistoklēs, BC.528頃-BC.462頃] アテナイの政治家、将軍」は、不承不承であるが、人身御供を容認しなければならなかった——ここでは原理は現実的に人を殺す原理として示されている⁽²⁰⁾。

(1) エピファニウス [Epiphanius, 315頃-403] サラベスの主教 [Adversus] Haeres[es]. XXX, c.16『全異端反駁書』三〇卷一六章) はエミオン派「初代ユダヤ人クリスチャンの一派。彼らは処女誕生を否定、イエスはヨセフとマリアの子、受洗後キリストが鳩の形をなしてイエスの上に降り、十字架の前にはキリストはイエスより離れ、イエスのみが受難し、復活したとする」について次のように語っている。Dyotinas sunistasin en theou tetagmenous, hena ton Christon, hena de ton diabolon, cai ton men Christon legousi tou mellontos aiōnos eilephēnai ton clēron, ton de diabolon touton pepisteusthai ton aiōna ec prostagēs dēhen tou pantocratoros cai aiōsin ecaterōn auton [この派は、二つのものを神から定められたものとして関連づけている。つまり一方がキリストであり、もう一方が悪魔である。さらに、各自の要求に基づいて全能者の命令により、キリストが来たらんとする時代を分け前として受け取り、一方悪魔はこの現在の時代を確かに受け取ったと信じられている、と主張している]。

(2) 「本書」前巻「第十三卷」四六八頁を見よ。編纂者。

時代の終わりまで異なった形式で持続する、人類に対するこの普遍的関係の外に、キリスト教が人類になお2)個々の人間たちへの特別な関係を与える。後から生まれたあらゆる人間はすでにこの霊「精神」の影響のもとに生まれ、その人間はこの霊「精神」の中で初めて刺激されるには及ばない。この点には、究極的概念において、つまり原罪すなわち人間本性「自然」の根本悪と名付けられるものにおいて、戻ってくるかもしれない。この悪の現存在をただ浅薄な哲学が疑いうるだけであるし、最も普通の人間を知る経験すら欠けているこのような哲学は、すでにカントが根本悪

に関する書物の中で部分的に挙げていたあの意気消沈させる経験を欠いている。それらは「以下の諸例は、カント『単なる理性の限界内における宗教』アカデミー版三三三頁による」、心からの好意にしても、「私たちの最良の友人の不幸のうちに、私たちを不愉快にしないものがある」[Earl of Chesterfield, 1694-1773 イギリスの政治家。彼の "Letters to His Son" にある言葉をカントが引用したもの]という発言を認めるものであるとか、最も親密な友情においてすら密かな裏切りがあり、最良の友人間においても信頼の程度を控えることが恰愼の格率にされるとか、義務を負っている者たちを憎む性癖があり、他人をかなり支援する立場にある人は、ほとんど確実にその者を密かなたいそう悪意のある敵としうるとか、人間本性「自然」の別の似た愛らしさをうるとかの諸経験である。——あの霊「精神」は人間の所有物であるが、それは人間がこのことを予感したり知ったりする以前にである。しかもあの霊「精神」は、決して完全には実現されないそれ自身において無限な可能性を、あらゆる形式、あらゆる彩りそしてあらゆる形態においてもあそぶが、それは人間なしに自分だけでは決して可能ではないものである。それゆえ、この霊「精神」は、人間の中に含まれている諸々の可能性を実現するために、ad actum「現実」に立ち至らせるために、人間を動かそうとする。諸事情と諸関係しだいで、他の新たに変わる諸々の可能性のこの汲み尽くせない源泉として、この霊「精神」は人間の生「活」を永続的に刺激し動かす者であり、／原理である。この原理なしでは、世界が眠り込み、歴史が零落し停滞するであろう。これがサタンに関する本来的な哲学的理念である。この霊「精神」は、一面で

は諸々の可能性において汲み尽くせないその本性「自然」と、他面ではその不可能性との故に、現実性への永遠の渴望者のようである。そのために、使徒はこの霊「精神」を、腹を空かしたライオンと比較する[『ペトロの手紙一』五章八節。・・悪魔が、ほえたけるライオンのように、誰かを食い尽くそうと探し回っている。』。この霊「精神」は、この霊「精神」がその永遠な病から、つまりこの霊「精神」の中に単なる可能性として存在しているものを人間の意志によって実現するという、決して満足させられない欲求から、誰かを食い尽くそうと歩き回り探し求める。それゆえ、人間の意志はいわば持続的にこの満たされない欲求につきまといられる。つねに待ち伏せし、この霊「精神」はあらゆる瞬間にあらゆる弱点、あらゆる空位を利用する準備をしている。これらの弱点や空位によって人間の意志は霊「精神」に自らの内にはいることを許すのである。新約聖書の諸意見によれば、至る所でつねに人間はある方法で霊「精神」の待ち伏せに取り囲まれている。この方法は制限された霊「精神」の本性「自然」と端的に相容れないものであり、しかもこの霊「精神」自身単なる被造物である。この関係に関しても、当然のことながら新約聖書はまったく実践的な観点に立っている。別の観点は、私が先に示した哲学的観点である。その観点によれば、この霊「精神」はあらゆる歴史的なものを必然的に *principium movens* 「動かす原理」である。この危険で霊的「精神的」な待ち伏せに関する新約聖書の諸意見を把握するために、ある原理が想定されなければならない。この原理が離れえない人間に関して、この原理は何ものによっても閉め出されず、至る所へ紛れ込みうるが、相対的に遍在することでもって、

人間に含まれているあらゆる可能性を探知することができる。サタンはこの陰謀に関する極めて重要な表現は、使徒パウロの表現である(『エフェソの信徒への手紙』六章一一節「悪魔の策略に對抗して立つことができるように、神の武器をつけなさい。」)。それは、*pros tas methodeias tou diabolou* 「悪魔の策略のために」、悪しき霊の策略や組織的な待ち伏せに対抗して持ちこたえるために、神の武器をつけなさいである¹⁾。経験の乏しい哲学のみが疑いうるものは、人間がこのような原理に関わり、しかもこの原理が人間をわなで囲むようにあらゆる種類の可能性で囲み、そしてこの原理が人間を、(人間を責めたこれらの可能性)によって、ちょうどこの原理が人間を服従させたように、従順にさせる以外の何ものをも試さない、ということである。人間のカタストロフィーは、人間があゝの原理の支配に属したがゆえに、墮落と名付けられる。人間は、自らの最内奥につまり自らの意志の源泉に毒を入られることなしに、世界の質料的刺激に負けるが、しかし人間は「ただ肉と血と」戦わねばならないのではなく、悪のあの霊的「精神的」な諸力と戦わねばならない[『エフェソの信徒への手紙』六章一二節。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と權威、暗闇の支配者、天にいる悪の諸霊を相手とするもの]。悪のあの霊的「精神的」な諸力にとって多くの人間は、人間自身が精神なしでは、それと引き換えに、あの霊「精神」にとつてのいかなる魅力も所有しないので、善き善良な者たちと名付けられる。——この種の人間たちは、すでに彼らの本性「自然」の粗い質料的なものによって悪の霊的「精神的」な諸力から遠ざけられ、しかも悪の霊的「精神的」な諸力はむしろ高貴な霊

的「精神的」な諸々の本性「自然」にまさに向けられ、諸々の本性的・内的なものは、それが諸力に対して入っていくことを認めると、そのことによって突然荒廃させられ、最も性悪な激情の舞台に変えられる。——これら霊的「精神的」な諸力に対する戦いが存在する。偽りの博愛のみが「悪を喜ぶ霊「精神」」の影響を疑いうる。偽りの人間愛、と私は言うが、人類の真の安寧は現在の状態を思い違えて幸福とする中ではない。現在はむしろ——幸福ではなく、戦いの「——」時間である。では、人間が自らの最内奥のものにおいて最も霊的「精神的」な誘惑により取り囲まれていないならば、勝利つまり永遠な浄福によって栄誉を授けられた有限な勝利があるのだろうか。根本的に長続きし、同時に生「活」のためにしつらえる教育（しかもどの教育もこうであるべきである）は、それを信頼している人々を悪の秘儀へ引き入れることを、つまり『ヨハネの黙示録』（二章二四節「……サタンのいわゆる奥深い秘密を知らないあなたがたに……」）が語るように、*ta bathe tou satana*「サタンの深み」を伝授することを、中止するには及ばない。それは、彼らが単に肉と血と戦わねばならない、という考えで、彼らが無経験ではなく世界の中に入ってくるために、つまり、〈蛇のように賢く、しかも鳩のように素直であれ〉（最高の矛盾、しかし満たされるならば、最高のもの）、とキリストがいかに命じるかを『マタイによる福音書』一〇章一六節「……蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。」彼らが学ぶために言い換えれば、とりわけ高貴な本性「自然」が避けられない経験に驚かないためである。というのは、暗記して学んだ課題を繰り返すことに、あるいは暗記して学んだ役割を演ずることに仕事

273
を制限しない誰もが、／すなわち世界を現実的に触れる誰もが、間違ひなくあの一般的な敵対者に出会い、そしてその敵対者と衝突するからである。

（１）プラトン『クラテュロス』403E。この神は、……完全な知者であり、……」はハーデスについて、ハーデスは偉大な *sophistes*「賢者」である、と言う。しかし、サタンについては、サタンは *cat exochen*「優れた意味で」ソフィストである、と語られる。（草稿の傍注）。

誘惑する霊「精神」は、新約聖書の中では、人間の外に存在するもので人間の意志の中に入り込もうとするものとして示されている。その本性「自然」は、無限なつまり真の可能性全体でありうるが、しかしながら自ずから実現されうることはない。それゆえ、この霊「精神」は人間にねだらねばならない、つまりこの霊「精神」は持続的な不安によって追い回されるものとして示され、キリストが『マタイによる福音書』一二章四三節「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからな」）、〈不純な霊が人間から外へ出る時、休らいを求めて不毛な場所をさまようが、休らいを見出さない〉、と言うように、人間の意志においてのみ休らいを見出しうるものとして示される。これに続いてキリストは、〈私が出てきた家に戻ろう〉、と語る『同書同章四四節』。——表現が絵画的であることは、この中では誤解されえないが、しかしながら、絵画的であることは概念を非常にはっきりと認識させる性質のものである。だから、不毛で本来水のない場所ということ、デモニッシュな本性「自然」そのものの不毛さが、つまり現実性への永遠な渇きが表現される。人間の外で、霊「精神」は、荒地地においてのように（テュポンを想起するであろう）、*anapausin*「休息」、休らいを求めるが見い出

せないでいる。その不安は人間の中で初めて静められる。人間の意志は、霊「精神」の *anapausis* 「休息」であり、人間の意志の外では、霊「精神」は現実性すべてから切り離され、絶対的不可能性の中にいる。——しかしながら、霊「精神」はかつて刺激され、現実性へと呼び出されたのである。自己を実現するいかなる手段をも見出さない諸々の可能性、すなわち諸霊「精神」がつねに残っているがゆえに、まさに、荒地は悪しき諸霊「精神」の住居と考えられた。——人間を支配した「暴」力は、人間の中へ入り込んだものとも表される。愛情深い師がユダに差し出した最後の一片のパンを携えている裏切り者ユダの中へサタンが入ったが、そのユダの場合がそれである (*eiselthen ho Satanas* 「サタンが入っていった」) [『ヨハネによる福音書』一三章二六節—二七節。……パン切れを浸して取り、……ユダにお与えになった。]

ユダがパン切れを受け取ると、サタンが彼の中に入った。……そうでないとすると、サタンによる鼓舞、靈感が問題である (『ヨハネによる福音書』一三章二節「……既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。」、『歴代誌上』二二章一節「……イスラエルのために焼き尽くす献げ物を捧げる祭壇……」)。

274
それゆえ、私たちは今、サタンと1)最初の人間との関係、2)全人類との関係、3)個々の人間との関係を確認し、至る所でこの原理の实在性を認識した。／そしてこの原理に対して、この原理が在来の理論において持っているのはまったく別の意義を確かに与えた。しかしながら、私たちが述べたことは、この教説が決してある決定を導いてくる本来的な論究の対象にならなかった、

ということである。ここでいわゆる異端が何に対して善であったかが分かる。マニ教は完全に反キリスト教的体系であったし、その限りでいかなる異端でもなかった。マニ教は、サタンが〈創造に先行した絶対的で創造されたのではない原理〉になるのを見る恐れから、別の面へとあまりにも考えを推し進める、という帰結をおそらく持ったにすぎない。私たちはサタンを原理と想定したことによって、私たちはサタンの意義を別様に規定した。この原理は、確かに創造において、しかも特に人間において、被造物性という制限の中へと定立されたが、だからといって、この原理はそれ自身において制限のない本性「自然」を捨てなかった。この原理は確かに、人間がこの原理を従属させている限り、創造とは対照的に現れえない。しかし、まさにそれゆえに、この原理は、この原理が人間の意志の主になり、自らの根源的な制限のない本性「自然」へ戻るために、人間の意志を初めからだましたり、魅惑したりしようとすることによって、その本性「自然」からして (注意せよ)、人間の意志にとつて危険なものである。私たちは人間に對するこの関係において、同時にこの原理を〈創造に関する完全で疑いのない真理を提示するのに必要な原理〉と認識した。というのは、創造は、創造に對立するあらゆる可能性が示され、しかも明らかになることにより、同時にそれが征服されることがない限り、いかなる完全な真理をも持たないからである。この観点に従うと、あの原理は〈隠れた悪を呼び出し、悪が知れ渡ることを楽しむ原因〉であり、しかもそれ自身悪であることはない。というのは、むしろ神自身がこの原因を許容し、それどころか、この原因を、欲しうる限りで欲するに違いないからである、つまり、

それ自身においてではないが、手段として欲するに違いないからである。このことは、サタンが旧約聖書や部分的には新約聖書においてすら（ヨハネの節において）、神によって端的に追放された原理としてではなく、（もちろん神によってさえ許容された、神の管理に属する原理、しかもこの限りで、神によって承認された原理）として、いかに現象するかを説明する。この関係から、さるなる規定が出てくる。つまり、被造物という制限から歩み出たので、／今サタンは純粹な原理であり、純粹で具体的なものすべて——本来、確証されることなしに確かな地歩を占めようとするものすべて、自分を信頼できると思っているものすべてと私たちは言うが、硬直したものすべて「——」に対立する霊「精神」（この霊「精神」は、この限りで、〈自分自身にこもり完全に動かなくなるように硬直するであろう被造物〉の敵として明らかに現象する）であるが、しかし創造を前提する霊「精神」である。しかしながら、サタンは被造物に起因しており、その限りで、たとえば、サタンが創造に対する反対として被造物ではありえないとしても、創造されなかった霊「精神」ではないのである。サタンが普通の考えからは説明されえないように、〈今や解放されたものと前提された原理〉の被造物的でないこの本性「自然」から、私たちは同時に、〈新約聖書の最も明白な意見にしたがって想定しうるし、何においても閉め出しえないサタンの影響〉を説明した。

ところで、これらの展開全体にしたがって、サタンが明らかに二重の見方を提示するとするならば（サタンは、性質「自然」に関して二重の考えが可能であるばかりでなく、必然的である——サタンはそれ自身において二面的性質「自然」のものである——）、

すなわち一面では持続的な反対者、矛盾を呼び起こす者、あらゆる不和や不一致の創設者、悪を生み出す者等々として、他面では許容された原理、少なくとも手段として欲せられた原理として二重の見方を提示するとするならば、特にキリストの話の中に、このイロニー、つまりこの二重の表象についてのいかなる痕跡もまったくなく、ということ、すなわち、キリストが話の中で〈悪しき、憎むに値する、神らしくない、それどころか神に反する霊「精神」〉だけを到る所で認識し示すということは、どうして起こるのであるのか。次のことで手短かにこれに答える。——神の子が悪魔の諸々の業を解消するために、神の子が公になる。それゆえ、キリストはサタンの直接的な対立者であり、サタンはキリストの直接的な敵対者である。このように、キリストは自分自身を観察する。それは、キリストが、自らの死が差し迫った時、〈この世界の頭目がやって来る。しかし、彼は私に——いかなる正当さもなく——何もすることがない〉（『ヨハネによる福音書』一四章三〇節「・・・世の支配者が来るからである。だが、彼はわたしをどうすることもできない。」）、と行うことによってである。しかもキリストが別の面から知っていることは、キリストによってこの世界の頭目が裁かれるということである。というのは、キリストは、〈私が遣わすであろう霊（paracletos「助け主」）が世界に、ho archon tou cosmou toutou cecritai「この世の支配者が隠れていることを」〉、すなわち、この世界の頭目の危機が生じたことを確証するであろう、と言うからである（『ヨハネによる福音書』一六章一一節「・・・裁きについてとは、この世の支配者が断罪されること・・・」。シェリングは *dioiti ho archon tou cosmou*

toutou *ecrithe* *ya hoti ho archon tou cosmou toutou *cecritai** としてゐる」。この危機がどこで生じるだろうかを／キリストは、天からの声が彼に彼の未来の栄光を確言する折に、明確に言う（『ヨハネによる福音書』一二章二八節「・・・天から声が聞こえた。」「私は既に栄光を現した・・・」）。〈今、この世界の危機が存在する。今、この世界の頭目が（彼が相変わず宗教的原理として地位を維持していた内面的なもののつまり中心から）外へ投げ出されるであろう〉。キリストは付け加える。〈私が世界から高められるだろう時、私はすべての者（すなわち、異教徒たちとユダヤ教徒たち）を私のところへ引きよせるであろう（それゆえ、世界のあの頭目の「暴」力を奪い取るであろう）〉、と〔同書同章三二節―三三節。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしが地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとに引き寄せよう。〕。それどころか、ルカにおいて（『ルカによる福音書』一〇章一八節「・・・サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。」）、キリストはあらかじめサタンを征服したと見ている。つまり、〈私はサタンが稲妻のように天から落ちるのを見た〉、と。天からサタンが落ちるこのことの意味を私はすでに説明した¹⁾。――キリストのサタンに対する戦いは、この原理がただ外面的にのみしかもその作用において克服された異教においてのように、単なる外面的な戦いではなかった。この戦いは原理にとって生「命」、内面的なもの、根そのものに及ぶ。生きるか死ぬかの戦いであつた。したがって、ここでも、衰弱した原理の側からの反応は、一般的で明らかなのであつた。というのは、その反応は物的なもの *das Physische* にさえ達し

ていたからである。プラトンの表現によれば、〈非存在するもの〉の領域に属するものすべてのように、罪、嘘、誤謬のように、病氣も、サタンによつてのみ世界にもたらされた。――しかし、一つのポテンツが、例えば、電氣が励起されると、すぐにまた、単なる分配によつて逆の電氣を発生する場合の自然においてのように、キリストの接近が独特な種類の病的現象を呼び起こした。これらの現象において、しかしながら、一つのことが注目し値する。というのは、厳密に注意するならば、たいていの憑かれた人々つまりいわゆる *Daemoniaci* 「悪魔たち」は、異教徒たちが住み、ツロ「フェニキアの最南端部にある都市」やシドン「北部パレスチナにある都市」、ガリラヤ「パレスチナ北部の地方名」やサマリヤ「中央パレスチナにある都市」に境を接するその地方に存在する、ということが見出されるであろうからである。エルサレムではこのような *Daemoniacis* 「悪魔たちの」いかなる痕跡も現れない、あるいは現れても極めてまれである。悪魔たちはユダヤ教徒たち自身にとつて異教的諸ポテンツである。というのは、異教的なものすべてが彼らにとつて悪魔的であるからである。異教的なものはユダヤ教的なものの中へ越境していくが、両者の境界はキリスト教によつて動揺させられた。この病氣は瀕死の異教の痙攣である。『ギリシア・ローマの』古代人の神託はすでに痙攣的諸現象を伴っていたが、／なぜ伴っていたかを、私はここでは、ある探究に足を踏み込むことなしには、説明できないであろう。この探究は、それが同時に新たな諸現象、例えば、後のいわゆる痙攣した人々を考慮しなければならぬことだけに、それだけいっそう詳細になるかもしれない探究である。キリストの単なる接近は、こ

のような病人が闊歩しているカペナウム「ガリラヤ湖北西岸の町」の教会堂の中でそうであるように、この現象を呼び起こすのに十分であった。〈やめろ。私たちはあなたと何の関係があるのか。あなたは、私たちを苦しめるために、やって来た。私はあなたが誰であるかを知っている。神の聖なる者だ⁽²⁾〉。同じように、別の折にもはっきりと述べられているのは、〈相変わらず⁽³⁾ (et「今なお」)キリストがこのような人間に近づいているおりに、病気が突発し、悪しき霊がこの人間をつかまえ、あちこちへ投げた⁽⁴⁾〉、ということである。

(1) 上述の二六三頁。——『神話の哲学』五三七頁も参照せよ。編纂者。

(2) 『マルコによる福音書』一章二三節以下「……汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。「……ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」。『ルカによる福音書』八章二七節以下「……悪霊に取りつかれた男が……大声で言った。……神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。……」と『マタイによる福音書』八章二八節以下「……悪霊に取りつかれた者が……彼らは叫んだ。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのに」ここにきて、我々を苦しめるのか。……」そしてより後の節「二九節」の *pro castris* 「ちょうどよい時以前に」を比較せよ。

(3) 『ルカによる福音書』九章四二節「その子が来る途中でも、悪霊は投げ倒し、引きつけさせた。イエスは汚れた霊を叱り、……」。『マルコによる福音書』五章二節「イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が……」の *euthēos* 「すぐに」を参照せよ。

病氣においても、人は必ずしも単に肉と血に関係するのではなく、またすべてのものが単に人間病理学的に *humana-pathologisch* 説明されうるものでもない。有機体全体に関わるいかなる病氣も、たとえ、それに関して質料を *material morificam* 「病を生み出す質料」と呼ぶ権利がないとしても、質料の産出による以外では

決められない、ということとはなるほど最も明白な真理である。というのは、むしろこの病氣は、病氣の靈的なポテンツが弱められ受動的にされたことの産物だからである。前もって靈的なポテンツが相対的に質料的になること——自ら質料化すること——という概念を、私たちの展開の連関の中で把握する人は、サタンについて今し方言われたように、病氣あるいは病氣の原因が質料という形式へ吐き出される——*exhalat ex*「外へそれが追い出される」——、ということにおいて、あのいわゆる批判的な決定の説明をする。キリストの時代の、しかもキリストの近くでの *Daemoniatis* 「悪魔たちの」物語は、それゆえ、キリストが順応しただろう単にユダヤ人的な諸表象を証明するに他ならない。病氣のこれら現象は実在的 *reell* 意義を持っている。キリストがサタンと、すなわち異教の実在的 *reell* 原理と戦うよう決められていた戦いが、外面的で物的な *physisch* 現象によって現れた、ということは、当然なことであった。すでに言及されたように、／＼生きるか死ぬかの戦いであったので、この戦いにおいて敵対者もキリストに対してもはや単に実体的な原理としてではなく、——意志として「——」意志に対抗した。いわば人類の中にまったく沈み込み、全人類という名において感じているキリストは、自分に対立する者の中に神の敵そして人類の敵以外の何ものをも認識できない。キリストはサタンを説明するために現存してはいない。

キリストの課題は、キリストが人類を救済するために勝利しなければならぬ敵のみを、サタンの中に見出す、という実践的課題である。その結果、彼(キリスト)を身につける誰もが、そうすることによって永遠にサタンの客観的な「暴」力から救われるであ

ろう。あの原理が客観的に圧迫されればされるほど、あの原理はますます主観的になる。そして勝利者にますます人格的に対立する。したがって、キリストがサタンについて語る表現もますます人格的になる。あの霊「精神」の中心に押し入ったキリストは、悪とは単に外面的な戦い以外で決して本来的に戦わなかった人間たちとはまったく別の生き生きとした人格的な諸経験をしなければならなかった。その場合、結局たいてい彼「キリスト」との契約という結果になる。それゆえ、まったく現実的な感覚つまり実在的な *real* 経験のみが述べられているキリストの話についてのいかなる判断も、本来的にまったく人間たちに属さない。誤解されずに私が言ってもよいことは、使徒たちの時代以来、人間はルター博士以上にほとんどサタンの生命を狙わなかったし、サタンの最も固有で最も内面的な力と優劣を競わなかった、ということである。しかし、周知のように、まさにこの男は悪魔の目の黒さを見たことを誇ったが、またこの悪魔について最も人格的な表象を持っていた「ヴァルトブルク城の一室で聖書を翻訳していたルターが悪魔にインク壺を投げつけたという伝説参照」。このような表現について、〈決して偉大なものを経験していなかったし、しかもあらゆる時代に、たとえあらゆる時代に別の形式においてであれ、作用している悪のこの霊的な権力が人々に現実的なものとして対立するあの点まで、決して戦わなかったそのような人々〉は裁いてはならない。この原理についてのより自由な見方が私たちに許されるならば、このことについて私たちはキリスト自身のあの戦いに負わねばならない。この戦いがこの原理の実在的な「暴」力をたいそう削いだので、この原理は今やもはや（戦いに

おいてのように）一面からではなく、あらゆる面から完全な精神の自由を持つて考察されうる。

279

第三十五講

私は講義した見方を基礎づけるばかりでなく、願わくば、あらゆる方面から完全にそれを解明した後になお、より一般的な探究が残っている。というのは、サタンの諸天使と同様に、別の面から神の諸天使について語られているので、このことが必然的に諸天使の一般的概念に導き、しかも現在の探究の領域における私たちの最終的課題は、書物「聖書」が諸天使という名前のもとで確立するあの独特な世界をまた私たちに説明すること、すなわちその世界の意義を究明することであるであろうからである。この際ほとんど余計なことと思えることは、天使界が啓示において神話と最も類似を持つものである、と述べることである。そこから、私たちは事実また、この探究でもって再び私たちの展開全体の出发点に近づく。

何よりもまず私たちは、以前の諸概念の中にすでに連結点が与えられていないかどうか、を顧みてみよう。

私たちがさしあたって諸天使の概念を考える限りで、この概念に類似的なものは、もちろん、キリストがあらゆる *arche* 「支配」と *exousia* 「権威」と *dynamis* 「力」を越えて高められた、と言われることによつて、以前に問題であった *archais* 「諸支配」と *exousiais* 「諸権威」において、あの諸ポテンツと諸「暴」力において私たちに与えられている「本書第三三講二三八頁以下」。それ

ゆえ、問題は、諸天使がこれら *archais* 「諸支配」と *exousiais* 「諸權威」とどういう事情にあるか、ということである。これについては、『ペトロの手紙一』(三章二二節)「キリストは、天に上つて神の右におられます。天使、また權威や勢力は、キリストの支配に服しているのです。」にある節がいかなる疑問も残しておかない。／つまり、そこではイエス・キリストについて、「この者は天に上り神の右にいる。諸天使や *exousiai* 「諸權威」や *dynameis* 「諸力」はこの者に従属している」と語られている。それゆえ、ここでは諸天使は *exousiais* 「諸權威」と *dynamesi* 「諸力」と同一線上に置かれている (*dynameis* 「諸力」は *exousiai* 「諸權威」より、諸ポテンツという私たちの概念をなお一層はつきりと表している)。(キリストはすべてのもの、以上に高まった)は、まさに「キリストが神の栄光で覆われた」ことを意味している。というのは、神はあらゆるポテンツを越えている原因だからである。なぜならば、神は「あらゆるポテンツに先立つて存在するもの」だからである。ここで最後に、積極的哲学が発点とした概念、つまり「あらゆるポテンツに先立つて存在するもの」つまり「直接的に存在するもの」の概念の重要な意義が明らかとなる。神があらゆるポテンツに先立つて存在していることよつてのみ、神は諸ポテンツの主である。

つまり、諸天使が諸ポテンツと等しく見られる、というそのことは、『ヘブライ人への手紙』(一章三節、四節)「御子は、……天の高いところにおられる大いなる方の右の座にお着きになりました。／御子は、天使たちより優れたものになりました。天使たちの名より優れた名を受け継がれたからです。」から受け入れら

れうる。ここでは、「キリストは高みにいる大いなる方の右に座っている」と言われた後に、「キリストは、彼が諸天使より優れた名前を相続したからには、諸天使以上にますます優れた者になった」と付け加えられる。しかし別の節で、まさにこのことが *archas* 「諸支配」と *exousias* 「諸權威」との関係で、「神は高まったキリストに、あらゆる名前を越えた名前を与えた」と言われる『エフェソの信徒』一章二〇節―二二節。神は、……キリストを……天において御自分の右の座に着かせ、すべての支配、權威、……の上に置き、……あらゆる名の上に置かれました。参照『フィリピの信徒への手紙』二章九節。神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。ところが、同時に諸天使 (*archai* 「諸支配」と *exousiai* 「諸權威」と同様に)は、あらゆる被造物のうちで最高の被造物である人間以上に高く、配置されているので、すでにそこから帰結することは、純粋な諸ポテンツとしての諸天使は、事実また、諸天使が創造された、とはどこにも言われていないように、人間やその他のあらゆる具体的な存在が被造物であるのと同じ意味で、被造物ではありえない、ということである。普通『コロサイの信徒への手紙』一章一六節「天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、……万物は御子において造られた……」のような一般的な節が引き合いに出されるが、そこではキリストについて、*en auto ecisthe ta panta* 「すべてのものが彼の中で創造された」、彼の中ですべてのもの、つまり、天におけるものや地にあるもの、目に見えるものや目に見えないものが創造された、と言われるし、しかもそこではその場合、目に見えないもので諸霊や諸

天使の国が理解されている。しかしながら、この反証 *Instanz* は、私たちの主張にまったく当てはまらない。というのは、ちょうど私たちがサタンについて、サタンは創造を前提している、すなわち創造なしにはサタンは存在しなかったであろう、*sine creatione etiam Satanae locus haud esset* 「創造なしには、やはり悪魔の座はまったくなかったであろう」／（このことはその上単に、自明のことである。というのは、いかなる創造も存在しなかったなら、創造のいかなる敵対者も当然存在しなかったであろうからである）、ということの説明したように、——それゆえ、明らかに創造においてサタンも一緒に創造されたように、「——」同じく確かに、創造が諸天使の前提である、すなわち、創造なしにはいかなる諸天使も存在しなかったであろうからである。しかし、そこからは、諸天使そのものが創造の対象であった、ということはどういふ結論しないし、しかも被造物とは、本来、自由で意図的な産出の対象であるもののみが名付けられるべきである。諸天使は、諸天使がまさに純粹なポテンツつまり純粹な可能性であるがゆえに、すでにこの意味で創造されたとは言われえない。しかし、単なる可能性は創造されないし、現実的なもの、すなわち具体的なもののみが創造される。——しかし、もちろん、あらゆる現実的なものとともに、諸々の可能性もまた一緒に認められているが（私は認められていると言う。それゆえ、諸々の可能性は創造の対象ではない）、諸々の可能性は、後で、*post actum* 「現実態の後で」、それゆえ、創造の後に現れうる諸々の可能性として一緒に認められている。というのは、人間の内にすべてのものが包括され、すべてのものが完成されているはずだからである。使徒パウ

ロ（『ヘブライ人への手紙』二章七節、八節「あなたは彼を天使たちよりも、わずかな間、低い者とされたが、栄光と栄誉の冠を授け、すべてのものを、その足の下に従わせられました。・・・」）が同じ意味で利用した『詩編』八篇「七節。御手によって造られたものすべてを治めるようにその足もとに置かれました。」において、〈あなたは彼をあなたの業の上に置き、あなたはすべてのものを彼の足の下に従わせた〉、と言われるように、彼は創造の頭であるはずである。というのは、〈すべてのものが頭としての人間のもとで合一されるはずである〉が『エフェソの信徒への手紙』一章一〇節。・・・あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。・・・』、この *anacephalatos* 「総括」（二つの頭のもとでのこの合一）が人間の罪によって再び廃棄されたがゆえにのみ、使徒の引用された議論から明らかに見て取れるように、人間、イエスによって再びすべてのものが一人の頭のもとにもたらされなければならなかったからである。それゆえ、人間、イエスは、『コロサイの信徒への手紙』（二章一〇節）・・・キリストはすべての支配や權威の頭です。』において言われるように、*cephale paues arches cai exousias* 「あらゆる支配と權威の頭」になった。それゆえ、現実的な創造が定立されると、この創造と共に、無数の可能性、つまり無数のポテンツが与えられる。世界の存在それ自身、単に可能的な存在であり、〈神の意志によつてのみ、その点において偶然的存在であるが、現実的な存在〉であるので、まさにこのことで、この存在のあらゆる矛盾も、認められた諸々の可能性として、つまり、あなたがたが次の例によつて自らに明らかにしうるものとして、よく理解されうる。／国家

の存在 Existenz と共に、国家に対抗する無数の可能性つまり無数の犯罪が、いかなる人間の悟性も汲み尽くしえないあるいはあらかじめ算定しえない諸々の可能性として定立される。同様に、創造が現実のうちに入り込むと、現実のあらゆる矛盾が諸々の可能性として、つまり諸ポテンツとして認められるが、しかしこれらの可能性は、あらゆるものがその頭のもとに包括されたままであると、勢力 Herrschaft へと、それぞれどこか表示へと到らない。私たちが以前述べておいたように、創造のあらゆる国に、それぞれどこか、この国のあらゆる地方に支配者が置かれるが、この支配者は普遍的な支配者の前では押し黙り、普遍的な支配者に完全に従属する。しかし、この支配者は自らの栄光を奪われると（しかも人間の場合はその栄光の喪失に他ならない）、その時、あの従属していた可能性、ポテンツそして霊すべてが高まりうる。そして人間は、それらが以前人間のうちにいたことの代わりに、それらの「暴」力の中に陥る。それどころか、これら諸ポテンツが創造によって可能性としてのみ定立されていた限り——これら諸ポテンツが正常な状態であって、善であつた限り（この意味で諸天使の根源的で純粹な善き状態について語られうる）「——」、神によって定立された統一性の中で、あらゆるものは一人の頭（人間）に包括されるはずであつたが、神によつて定立されたこの統一性が、人間の罪により解体し消滅することによつて、今や、諸ポテンツが現れ出て、詳しく言えば、諸ポテンツには規定されていなかった、つまり諸ポテンツが持つべきではなかった権力と「暴」力とを携えて現れ出て、悪しき諸霊として現象する。hegemonicon「指導的なもの」、有機体を支配するものが自らの権力を確保して

いる限り、そのものの状態は純粹で善き健全な状態であるのとまさに同じであるが、しかし、あの支配するものが動揺するようになると、その時、以前には何も感じられなかった病気の諸霊 Krankheitsgeister が現れ出るが、この病気の諸霊について、この諸霊が初めて現れ出たがゆえに、この諸霊が創造された、とは言われない。後で、獲得されたあの「暴」力においてまさに、諸天使つまり悪しき諸霊は被造物ではないし、被造物的でもない ungeschöpfig. 使徒が、〈私たちは肉と血と戦う必要はない〉、と言う時『エフェソの信徒への手紙』六章一二節。わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、．．．」、別のところの言語用法により、このことは〈私たちは単なる被造物（具体的な存在者）と戦う必要はない〉とまさに同じである。事実また単なる被造物は、／新約聖書の中で悪しき諸霊に帰せられる、人間の内面的なものへと押し入るあの危険な影響を、行使しえないのである。

しかし、その上、創造の後初めて、それどころか、創造の経過において現れ出たこの種の道德的で英知的な諸ポテンツを、と私は言うが、この種の道德的で英知的な諸ポテンツを承認することを決つたとするならば、それとは反対に、ますます強要されたことは、物体的 physisch 世界つまり自然の国に対してこのような諸ポテンツを、特に、〈無からのように突然生じ、地上に広がり、人類の間に恐ろしい崇拜を引き起こす、予め知られていないあの病気〉の中に、承認することである。これらの病気について言うことは、それらが単なる質料的な手段でもって戦われたりあるいは無力化されたりしえないように、単に肉や血から説明されえ

ない、ということである。ダビデの時代、ひどい疫病でエルサレムの人々を打ちのめした天使——破滅の天使「——」がいる⁽¹⁾。

しかも旧約聖書の熱烈な詩人⁽²⁾は、〈全能な者の傘と陰のもとに留まる者〉を褒め称える。というのは、〈全能な者はあなたを獵師（待ち伏せする敵）のわなや有害な悪疫から救う——あなた

は夜の恐怖、昼中飛んでいる矢、暗闇の中を這い回る悪疫、日中襲う長患いを恐れるに及ばない、すなわち、それらは目に見えないので、それらは明るい日のもとでは見られないし、避けられない〉、と歌うからである。——長患い *Seuche* は流行病 *Sucht*

と同じ語源である。それどころか、消耗性疾患 *Schwindsucht* などのように多くの合成語において病気を意味するものと同じ語源である。あらゆる普遍的で宇宙論的な病気は、流行病であり、諸事物や人類の現在の状態を犠牲にして実在化しようとする活気づいたポテンツである。そして、それは、現実性への渴望により駆り立てられるように、現実性に呑み込まれる人を探す。ところが、永遠の過去として創造のもとに包括されるべきであったこれらのポテンツは、〈す、べ、て、の、も、の、の、根、底、に、あ、る、原、ポ、テ、ン、ツ〉からの

284

ぎ離しあるいは高揚の結果、現れ出るにすぎないように、／したがって、あれら特別なポテンツすべてが、いわば子供たちや子孫たちのようにあの原ポテンツに由来するが、個々の悪しき諸霊が子供たちとそして天使たちと、すなわちサタンの使用人たちと考

えられるならば、それは極めてよく理解されることである。

(1)『サムエル記下』二四章一六節「御使いはその手をエルサレムに伸ばして、これを滅ぼそうとしたが、……」

(2)『詩編』九一篇「二、三、五、六節。いと高き神のもとに身を寄せて隠れ／全能の神の陰に宿る人よ／……神はあなたを救い出してくだ

さる／仕掛けられたわなから、陥れる言葉から。／……夜、脅かすものも／昼、飛んでくる矢をも、恐れることはない。／暗黒の中を行く疫病も／真昼に襲う病魔も」。

悪しき諸天使についてはこれだけである。悪しき諸天使は、諸ポテンツが従属していた支配のもとにはやいまい諸ポテンツである。

ところが、私たちは善き天使たちをどの様に説明するのであろうか。ひよつとして、これも単なる諸ポテンツとして説明されるのであろうか。もちろん、そうである。悪しき諸天使の反対の意味においてにすぎない。というのは、現実には存在すべきでなかったが、人間の墮落あるいは罪によって作用するようになる「権」力を獲得したこれらポテンツが存在するならば、反対に、あらゆる善き天使たちは、神の意向に従って、現実的に存在すべきであったが、むしろ人間の罪によって単なるポテンツつまり単なる可能性として、言い換えれば、実現化しなかったものとして定立されたものであるからである。それゆえ、善き天使たちは、天使として、すなわち単なる諸ポテンツとして、また創造されていない。善き天使たちが現実的に存在すべきであった、というのが意向であったが、善き天使たちはそうではない。彼らは *merae potentiae* 「純粹な可能性」のままであり、それゆえ、そのものとしてまさに創造されていない。悪しき天使たちは存在すべきでなかった諸霊である。しかし、彼らには同一の経過によって、現実的になることが認められた。そのことによって、存在すべきであった諸ポテンツが単なる諸ポテンツのままであり、現実「化すること」を妨げられた。そして諸ポテンツはただ潜在性において

定立されたものとして存在する *existieren*。というのは、悪しき天使たちが絶滅されなかったからである。——墮落によって、人間は自らの天使から別れ、そして人間が本来あるべきであったものを自らの外にポテンツとして定立した。死後霊界においては関係が逆転してほしいものである。死後自らの天使とは合一しえないし、天使たちのあの普遍的な生「活」に適合しえない人間は、最も悲しむべき最も深い潜在性（暗闇）の中へ定立されるであろう。というのは、この「世の」生「活」においてのみ、人間の特性 *Eigenheit* に作用することが認められるが、まさにこの特性にとつて、あの地域は夜であり、この特性は夜にはもはや作用しえない。ルカの物語においてラザロの靈魂は天使たちによって受け入れられるが「『ルカによる福音書』一六章二二節。……この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。……」このことは、今述べられたことによつて説明される。けれども、人間について言われることは、あらゆる被造物についても同様に言われる。というのは、あの一般的な刺激により、宇宙は今ではもう（自らの諸部分を互いに閉め出すこと）で存続している——まさにそれゆえ移ろいやすい——「有機体」にすぎないからであるが、世界を導き続けたこの刺激により、あらゆる事物が転移、転置を経験した。あらゆる事物はあるべきであったものではないし、自らの理念に適ったものでもないし、それゆえ、あらゆる事物は自らの外に自らの根源的理念を持っている。したがって、キリストも、彼の父が彼のもとに遣わした天使たちの軍団について語るように「『マタイによる福音書』二六章五三節。……父は十二軍団以上の天使を今すぐ

送ってくださるであろう。」、ユダヤ人たちの考えにしたがつて、あらゆる事物も無数の善き天使たちを持っている。この説明から、善き天使たちははその本性「自然」からみて善き天使たちであり、その限りにおいて意志がない天使たちである、ということが分かる。今までのように、被造物と考えられた善き天使たちは、しかしながら、この上なく無趣味で退屈なものである¹⁾。彼らは事実上、この意味での彼らをからくりとして利用した詩すべての中に現れている。善き天使たちは意志のない靈たちである。というのは、彼らはまさに、存在すべきであったものに他ならないからである。善き天使たちに意志がないことは、想定された事柄である。思慮深く敬虔なハラール [Albrecht von Haller, 1708-1777] スイスの解剖学者、生理学者、植物学者、詩人。Vom Ursprung des Übels 「悪の起源について」 1734。この詩の中に「欠陥のある国は意志のない天使たちの国より善い」という句がある」は、彼の弁論の中で、（欠陥のある世界は意志のない天使たちの軍勢より一層善い）、と言う。まさに天使たちは自らの意志がないがゆえに、使徒（『ヘブライ人への手紙』一章一四節「天使たちは皆、奉仕する靈であつて、救いを受け継ぐことになっている人々に仕えるために、……」）は彼らを、淨福を相続してうるべき人々に仕えるために派遣された *leitourgica pneumatata* 「奉仕する靈たち」、奉仕する靈たちと名付ける。というのは、悪しき靈に人間が力をかけて存在を得させることを、悪しき靈が人間にねだり、その靈に一つの可能性が許容されると、その靈は人間につねに諸々の新たな可能性を提示することができるように、善き靈も人間にねだり、そしてあらゆる人間は、東洋人たちしかも特にユダヤ

人たちも教えるように、自らの善き天使と悪しき天使との間に、この「世の」生「活」において正しく本来的に配置されるからである。善き天使は人間を見捨てず、たいそう人間と結びつけられるので、善き天使は神から離れることにおいても自分の協力で——いわば自分の目で見て「——」人間に従う。それゆえ、キリストは、悪が未だに休息し未発達の子供たちについて、次のように言う²⁸⁶。「天にいるあなたがたの天使たちはいつでも／天にいる私の父の顔を見ている。彼らは未だに引き離されていない」と。善き天使たちは、たとえ現実「化すること」から閉め出されたとしても、しかしながら、創造から分離された存在者たちではない。現実「化すること」から閉め出されたとしても、善き天使たちは、現実との関係においてのみ現存在することを放棄しはしない。あらゆる天使は特定の被造物のあるいは個体のポテンツ——理念——である（したがって、諸民族は諸個人と見なされるがゆえに、あらゆる民族も自らの天使、つまり自らの霊を持つ）。人間が自らの善き天使に対する関係は、神と疎遠になることにおいても人間にまだ残っている唯一の関連である。それゆえ、善き天使たちは神の使者たちと呼ばれる『歴代誌下』三十六章一六節。彼らは神の御使いを嘲笑い、・・・」。しかし、使者たちは遠離することに對して必要であるにすぎない。このことは、善き天使たちがまさに天使すなわち単なる諸ポテンツである状態において、善き天使たちが創造されえない、ということから明らかである。というのは、神から遠離することは創造のうちには存在しなかったが、創造の後に初めて入り込んだからである。ばらばらにされた創造を再び一人の頭のもとで合一するよう指定されたその人が到来する以前に

は、善き天使たちが人間の世界と神の世界とを結ぶ唯一の環であった。律法が直接神から与えられさえたということとは、ユダヤ人の自惚れをなおのこと一層くすぐったであろう。しかも、プラトン主義者フィロは、律法の告知を天使たちに関係させないあらゆる努力をする。それゆえ、キリストの時代に、ユダヤ人たちが、モーセの律法は天使たちの調停によって与えられた、という意見であり、しかも使徒がこのことを保証するならば²⁸⁷、このことは実在的な²⁸⁸ *real*感情においてのみその根拠を持ちうる。というのは、まさにこの点に、旧約聖書の啓示とキリストの現象との相違が、つまり、旧約聖書の啓示では神はおもに天使たちを通して、キリストの現象では子であるキリストを通して自ら語りかけた、という相違が存在するからである。キリストは天使たちすべてを当然越えていたし、しかも天使たちすべてはキリストが現象している間にすでに自分たちの主として彼に仕えた。キリストが現象する以前に、現実「化すること」から妨げられ閉め出されていた善き天使たちは、キリストの誕生と共に、潜伏というこの状態から現れ出る。キリストの誕生の際にすぐ、ルカは／「高みの神に賞賛あれ」と歌い始める天使たちの軍勢を出現させる『ルカによる福音書』二章一三節——一四節。・・・この天使に天の大群が加わり、神を賛美していった。「いと高きところには栄光、神にあれ、・・・」。そしてキリストは、自らの教師の職を始めてすぐ、彼を神の子、メシアと認めた最初の人に次のように言う（『ヨハネによる福音書』一章五二節「新共同訳聖書では同章五一節になっている。・・・天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見るようになる。」）。〈今からあなたがたは

天が開き、神の天使たちが人の子の上に上がりたり下りたりするのを見るであろう。すなわち、子と神の間にあなたがたは絶え間ない決して止むことのない結合を見るであろう」と。

(1) 第一部第一卷四七三頁の表明を参照せよ「Aus der Allgemeinen Uebersicht der neuesten philosophischen Literatur」最近の哲學的文學の一般的概観から」の最終頁。シュレーター版シェリング全集第一部第一卷三九七頁。……キリスト教の英雄叙事詩において、天使たち——そもそもあらゆる存在者たちの内の最も退屈なもの——が主役を演じている。……」。編纂者。

(2) 『マタイによる福音書』一八章一〇節「……彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである」。

(3) 『ヘブライ人への手紙』二章二節「もし、天使たちを通して語られた言葉が効力を発し、……」。『ガラテヤの信徒への手紙』三章一九節「……律法は、……天使たちを通して、仲介者の手を経て制定されたものです」。『使徒言行録』七章五三節「天使たちを通して律法を受けた者なのに、……」。

ところで、この説明をよく把握した者にとって、天使たちに関する旧約聖書や新約聖書の意見の中で、説明されえないものはほとんど残らないであろう。この人は天使たちを、ちょうど神話的表象のように、すなわち、比喩という意味ではなく、一般的に理解し把握しうるであろう。というのは、これらの存在者は現実的な諸ポテンツであり、悪しき存在者たちは、〈存在すべきではなかったが、人間の墮落によって定立されたそのような存在者たち〉であり、善き存在者たちは、〈存在すべきであったが、まさにその墮落によって単なる諸ポテンツのままであるそのような存在者たち〉であるからである。しかしながら、特に、ほとんど提出せざるをえない問いは、なお解決を要求するかもしれない。使徒たちの意識は、あの archon, exousion と dynamion 「諸支配、諸權威そして諸力の」理念によって、つまり、私たちの意識から

まったく疎遠になったあの諸ポテンツと天使たちの理念によって満たされている。そういうわけで、(ただ偶然的ではない) 一時的なものは、明らかに誤認されえない。それゆえ、この一時的なものは何に基づいているのだろうか。——異教やモーセの律法のものである程度まで無制限であった宇宙論的諸權威の「暴」力は、キリストによる廃棄において、まさに初めて把握される。ところで、あらゆる支配的ポテンツは、その様な作用において最も少なく、その廃棄において最もはっきりと感じられる。それゆえ、これら諸權威の最もはっきりとした感覚がキリストと使徒たちに内在しているに違いなかった。世界をこれらの諸ポテンツの權威から解放した者にとって、(彼が戦った、誤って引き起こされた諸力すなわち諸權威)のあのいわば無秩序な靈界「精神界」は、最も直接的に、現に存在していなければならなかった。キリストにとって諸權威はまだ客観的な「暴」力を持っていたが、この「暴」力は諸權威からキリストによつて、まさに初めて取り上げられ、それゆえ、キリストにとつて諸權威は、特にしかもまったく特別な方法で、客観的でなければならなかった。異教と／偽りの神々とを現実的な諸權威として破壊したキリスト(人間の単なる表象の中ではなく、客観的に諸權威が破壊された)は、それらの「暴」力のもとにいた人々よりもなお一層、おそらくそれらの実在性に関する最もはっきりとした感覚を持っていたに違いなかった。特に使徒たちの多くの表現の中では、ある種神話的な色合いは誤認されえない。これらの表現はキリスト教における神話の反映である。この神話的なものを拒絶しようという努力をする必要はない。この神話的なものは承認されなければならないし、ただ通常とは異なっ

て説明しようとされなければならない。諸悪霊に関して使徒たちによって用いられたまさにこれら神話的表現が、実在性を証明する、つまり異教に関する私たちの見方の真理性を証明する。そのように使徒たちの意識に異教の表象そのものを押しつけることが十分強いならば、おそらく——単なる想像ではなく——事実、Sacheであるに違いない。使徒ペトロはヘシオドスの『神統記』を読んではいなかったが、しかしながら、ペトロはまったく似ている諸表現で語っている。一面的で排他的なユダヤ人的なものが、使徒たちにおいて廃止されたことによって、彼らの意識は異教的なものに対しても開かれ、異教的なものがまた彼らの意識の中へと入り込んだ。二つの配剤が互いに対して緊張していた。この緊張が当然廃棄されたことによって、一方は他方の実在的なものもはや閉め出さなかった。

このことは大いなる開示であるので、私はなお使徒の手紙からこのように語っている二、三の節を引用しよう。

私がキリスト教の最古の記録の一つと見なす『ユダの手紙』の中で、使徒たちについて語られる（六節）「……自分たちの領分を守らないで、その住まいを見捨ててしまった使徒たちを、大いなる日の裁きのために、永遠に鎖で縛り、暗闇の中に閉じ込めました。」つまり、〈使徒たちは自らの初めを守らず、彼ら自身の居場所を見捨ててしまい、大いなる日の分かれ目まで、永遠の紐帯で暗闇の中に (*desnois aidiois hypo zophon*「永遠の鎖で暗闇のもとへ」) 閉じ込められた」と。それゆえ、ここでは悪しき天使たちが考えられている。悪しき天使たちについて、a) 〈彼らは彼ら自らの初め (*ten heauton archen*「彼ら自身の領分」) を守ら

なかった」と語られる。〈彼らの初め〉の代わりに私たちは〈彼らのポテンツ〉と言うこともできる。というのは、あらゆる初めはまずもってポテンツにすぎないし、しかもあらゆるポテンツは初めにすぎないからである。彼らは自らのポテンツを守らなかった、すなわち、彼らは、彼らが創造され、／彼らに割り当てられ、彼らに特有な存在（彼らの *idia arche*「固有の領分」）であったなるポテンツから歩み出た。b) 〈彼らは彼らの居場所を見捨てた〉、と言われる。これは同一概念の別の表現にすぎず、この表現は、私たちが次のように言う場合以上に、根本において具象的ではない。それは、〈彼らは *quo initio fuerant*「最初に彼らがいた」あるいは *quo esse debebant*「彼らがいることを義務づけられていた」*eo loco*「その場所」に」もはやいない〉、言い換えれば、〈彼らは、創造によって彼らに与えられた場所を見捨てた、すなわち、彼らだけが閉め出されなかった、可能性という単なる場所を見捨てた〉（というのは、現実的なもののみが現実的なものによって閉め出されるが、現実的なものによって可能的なものは閉め出されないからである）、と言う場合である。それは、キリストがサタンについて (*en aletheia ouch hesteken*「真理の中に彼は決して立っていなかった」)、彼は、彼のみが真理を持つ関係の中に、立ちえない。この関係の外では彼は嘘と偽りすぎない、と言う時『ヨハネによる福音書』八章四四節……悪魔は……真理をよりどころにしていない。……キリストが考えているものと同じである。それは、ヨハネがサタンについて *hoti ap' arches hamartanei*「彼が初めから罪を犯すこと」、すなわち、〈サタンは、彼が存在するや否や初めから、彼が創造によって定立され、しか

も中心としてつまり彼のあらゆる運動の目標として、すなわち動くべきではなかつた点として彼が見なさねばならなかつた場所から、動いた、[、]と言う時『ヨハネの手紙二』三章八節。・・・悪魔は初めから罪を犯しているからです。・・・、ヨハネが暗示しているものと同じである。悪しき天使たちについて、c) (彼らを大いなる日の分かれ目まで永遠の、すなわち引き裂くことのできない紐帯で神は暗闇の中に引き止めておく、[、]と言われる。つまり、彼らの天賦の潜在的可能性 *Potentialität* は、彼らが自分自身によつてはまったく越えられないが、人間の助力によつてのみ越えることができる彼らの制限である。それゆえ、彼らは、彼らが引き裂くことのできない(なぜなら、彼らの本性に基づいている)紐帯で結びつけられている暗闇、すなわち(非存在するもの)の領域からのみ、作用しうるのである。彼らは、人間が自らの意志で彼らをそこから解き放つ時にのみ、現れ出ることができる。

『ペトロの手紙二』(二章四節)「神は、罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められました。」で用いられる諸々の表現は一層神話的である。そこでは、(神は、罪を犯した天使たちを容赦しなかつた。すなわち、彼らは、彼らの中心であり、彼らが立ち去るべきではなかつた場所から(ポテンツから高まる傾向性によつて、しかも人間の意志を惑わすことにおいて)立ち去つた)、(神は彼らを容赦しなかつたのではなく(自然で必然的な帰結であるものは、罰と見なされる)、(神は、彼らを最後の分かれ目まで見張るため、彼らを暗闇という鎖で地獄へと閉じ込めた)、[、]と言われる。ここでギリシア語を読まなければならない。 *seirais zophou tartaros*

paredōcen eis crisin tēterēmenous「暗闇という鎖で閉じ込めた者は、裁きのために、」[彼らを]「監禁される者たちとして引き渡した」。特に目立つのは *tartaros*「閉じ込めた者」であり、その上どこにも、つまり新約聖書の中にも旧約聖書のギリシア語訳の中にも現れない言葉である。セクストゥス・エンピリクス [*Sextus Empiricus*, 二世紀末頃のギリシアの医者、哲学者]だけが、合成された *catartarōo*「地獄へ投げ落とす」をクロノスについて用いている[「ピュロニズム概説」三卷二一〇行、*Loeb. No. 273, P. 466*, ゼウスはクロノスをタルタロスへ押し込め・・・」。アポロドロス [*Apollodoros*, 前二世紀のギリシアの文法家]もこの言葉を巨人族の一人に用いている[*Bibliotheca*「図書館」一卷一章四節、*Loeb. No. 121, P. 6*, ・・・彼らの仲間がタルタロスに投げ落とされた・・・」。ヘシオドスが巨人族について語っているような方法をこの単語で考えざるをえない。

Entha theoi Titēnes hypo zyphō eeroenti
Cecryphatai, boulēsi Dios nephelegeretao,
「ここ暖々たる暗闇の下に ティタンの神々は
隠されているのだ 雲を集めるゼウスのご意向のままに。」
〔「神統記」七二九、七三〇行「*広川訳岩波文庫九三頁*」〕
そして別の箇所において、

Titēnas — men hypo chthonos euryodeies
Pempsan cai desmois en argaleoisin edesan
「ティタンどもを・・・路広の大地の下に
彼らを送った 辛い縄目で 縛めたのだ」
〔「神統記」七二七、七二八行「*広川訳岩波文庫九一頁*」〕

ここでは、それゆえ、私たちは *zaphos* 「地獄」の外でも辛い、足かせを持つている。この箇所で表現の神話的なものを拒絶しようとすることは本当に愚かなことであろう。しかし、この神話的なものが正しく理解されるならば、この神話的なものは、私たちがいかなる経験もはや持たない実在的な *real* 感覚からこの表現が流れ出る、ということのみを示しているにすぎない。というのは、使徒たちは盲目の意識と自由になった意識との境界にまさに立っていたからである。彼らの諸表象は、彼らが体験した分かれ目そのものに由来する。しかも分かれ目そのものにおいて、あの諸權威は自らの客観的な「暴」力を奪われた。

私はここで、資料「題材」の直接的親近性にゆえに、別の重要な問いになお触れざるをえない。数多くの天使の現象、特に旧約聖書に満ちあふれる神の顕現が何を意味しているか、という問いに触れざるをえない。しかしながら、神性はそのものとして現象しえない、ということに関して意見が一致しているので、昔から人は、特に教父たちは、これらの物語を真理と主張するために、しかしながら、神性に不適当なものを認めることなしに、ここに方策を見つける努力をすでにしていた。最も普通の説明の一つは、

291
これらすべての現象には／本来人の子のみが存在しているし、この子が、後に完全に人間になるように、この時以前にすでに旧約聖書の中では一時的な方法で人間の形態をとっていた、と言うことである。つねに一人の人格「人物」のみが現象するならば、このことはおそらく十分に考ええたであろう。イサクの誕生を告げるためにアブラハムのところへやって来る三人の人たちをどの様に説明しようとするのであろうか『創世記』一八章二節・・・

三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、・・・」。人類は総じて意識の神話的緊張の中にいたが、意識のこの緊張によって可能であるにすぎなかったこれらの現象をそのものとして説明することだけが残っている。神々の諸表象を媒介する同一の神話的緊張は、ちょうど最初の共同体の授かり物が聖霊の授かり物であるように、ここでは現実には神が現象することの媒介物になる。しかし、聖霊がそれを通して作用した手段（媒介物）は、後に中断し喪失した、意識の状態によって与えられた。神話的諸表象を媒介しうるのも、しかも旧約聖書の〈神の顕現〉において神性の現実的現象の媒介物でありうるのも同一の諸ポテンツである。以前の説明によれば「本書第二三巻第九講一八七頁」、神話と啓示そのものは実体的内容によって区別されないように、旧約聖書の〈神の顕現〉においても、実体的諸ポテンツは神話において作用するのと同じの諸ポテンツである。旧約聖書の〈神の顕現〉が神の現象であるのは、質料的なものによってではなく、神の顕現の中に有効に浸透しているものによってである。

これらの説明方法が、以前の説明方法から異なっていることすら、あなたがたは理解する。つまり、これらの説明方法は、〈神の顕現を神話的物語と、すなわち根本的に単に詩的な物語と説明し、この詩的なものを心理学的に必然的な帰結として高度な古代の精神から導き出した限りでのみ、完全には作り話に等しいもの」とされなかった以前の説明方法」とは異なっている。神話を単に主観的に説明する者にとって、あの諸現象に対して主観的な説明のみが残っているにすぎない。というのは、あれらの現象と神話的諸

経過との間の類似はあまりにも明らかであるからである。あの主観的で神話的な説明方法が是認されうるわずかな範囲で、この説明方法を先ずもって使用した人々に容認しなければならぬことは、本来の解明が見出されえたであろう場所を彼らが暗示した、ということである。それはたとえ、／当時の支配的な通俗哲学の尺度からして、おそらく別の状態ではありえなかった神話に関する不十分な諸概念が、彼らに真の解明を見出すのを妨げたとしても、そうである。周知のようにアイヒホルン [Johann Gottfried Eichhorn, 1752-1827] ドイツの聖書学者。聖書学に初めて「高層批評」なる用語を導入。旧約批評学の父と呼ばれる」は、神話的説明を旧約聖書に適用を試みたほぼ最初の人であった。アイヒホルンはより初期に實際生き生きとした発明の才のある人物であったがゆえに、しかも、たとえこの人自身進めることができなかったとしても、ある道を指し示すこの人は回想するに値するがゆえに私は彼の名前を挙げる。旧約聖書のたいそう多くの物語や考えを一層分からせるこの最初の試みは、いつでも称賛に値する。

それにしても、最後に扱われた資料「題材」にあまりにも多くの時間と熱意をかけた、誰も非難しないだろうことを私は希望する。善き天使たちと悪しき天使たちの諸表象と同様に、サタンの諸表象は、キリスト教の内容全体にたいそう深く関与しているもので、これらについて自らの見方を確立していない者は、キリスト教全体の意味について変わりやすい諸表象のみを持ちうるにすぎない。しかし同時に、私が絶えず特殊な講義と一般的な目的とを結びつけることを考えてきたように、この最後の展開は、今まで哲学にとってまったく疎遠であった概念を、つまり本来の精神

界、「霊界」の概念を学問の中へ導き入れることに役立った。

現在の生「活」での人間の意義は、自然と精神界「霊界」とを結び結合部である、としばしば言われる。しかしこの際、精神界「霊界」ということで、人間が今すでに実存しているあるいは少なくとも実存すべき世界のみが本来理解された。けれども、ここでは本来の精神界「霊界」が問題である。このような世界と連関しているという意識、つまり、この世界「現世」の外でも禍福に関与する普遍的な存在者で依然ある、という意識が、人間をして初めて地上の域を超えさせる、それどころか、自然の域を超えさせる。自然は自らの外に別の世界を持つことによって、自然そのものが自らの制限において一層分かりやすくなる。カントは五十年前、人間の認識能力の全領域を端から端まで歩き論じ尽くしたと思っていた。人は後に、概念とあらゆる可能な概念運動との全範囲を、／論理的円環で限定しようとした。細心に注意すれば、当時の偶然的な世界観によって与えられたまさにあの諸概念が包括されているにすぎない。しかしすでに現在の展開のなかに、あれらの試みが何も予想しなかったまったく多くの概念や多くの概念運動が現れてきている。あれらの試みは、試みの創始者たちが見出し知った世界と関係していた。彼らが端的に何も知らないし、彼らが自らの概念の範囲においても完全な歪曲によってでもなければまったく受け入れえなかった世界が、これらの講義において私たちに明らかにされた。このことは、哲学のあらゆる性急な決定やこの決定を自慢することに対する警告として役に立つかもしれない。啓示の哲学という事実がすでに示していることは、今までの哲学によって包括されていなかったまったく世界がなお残っていた、

ということである。

ところで、今まで講義されたことの中には、啓示を形式的関係や質料の関係において理解するための私の判断に必要なものや、啓示の哲学によって要求されるものすべてが含まれている。というのは、例えば実践的なもの、つまりキリスト教的生活の道德の中へ、この哲学は入るには及ばないし、少なくとも必然的な方法で入るには及ばないからである。これは理論的理念から自ずと明らかとなる帰結である。普通の教義学の教説のうちの何かある一つが特別に論究されるに到らなかったとしても、しかしながら、あらゆる論究が包括される学問的手段は与えられている。私が先ず初めに説明したことは、思弁的な教義学ではなく、高次な歴史的關係からキリスト教を説明することが問題である、ということであった。諸事物の初めにまで引き返すこの高次な連関は完全に説明された。確かなお詳論されうであろうことは、この高次な内面的歴史から外面的歴史へ移行することである。この移行は、キリストの言葉の実行を託された教会によって媒介される。したがって、私たち最後の探究の対象は、キリスト教の教会の歴史あるいは展開でなければならないであろう。このことのための主、導、的、諸、理、念、を立てる¹⁷ことが、次の講義の内容であり課題であるだろう。

ここに翻訳したものはフリードリッヒ・ヴィルヘルム・フォン・シェリングの『啓示の哲学』（一八四二年）第二部第三書の第三四講と第三五講である。本書全三七講すべてを訳すつもりであり、紙面の関係上とりあえず二つの講を公表した。訳者の能力並びに本邦初訳故の誤りをできる限り少なくするために、忌憚のないご批評ご指摘をお願いいたします。（17）以前については弘前大学人文学部紀要第一七

号を参照されたい。

なお、「」の中はすべて訳者の補いであり、〈〉は文章を明確にするために訳者が適宜付け加えたものである。欄外の数字は原文のおよそのページ数である。